

## 第4回 風と共に来り

食卓の窓から椰子の木が見える。窓枠にちょうど納まるように、三本が並ぶ。

朝食をとりながら、ロンドン時代のように、私はつい窓の外空を見上げる。

椰子の木は、ひよろひよろと、とっても背が高い。節くれだつた灰色の幹は、なんとなく左へ湾曲している。そのてっぺんのほうで、ざくざくとした硬い葉が、葉脈に沿って手を広げ、大きなほうきのように空をはく。



椰子の葉を刈り込む前は、2羽で一緒にとまっていたこともありましたが

葉の付け根、刈り落とされてしまった古い葉が枝のように茶色く固い突起となっていて、二羽の鷺がとまっている。

どこから飛んでくるのだろう。

左側と真ん中の、二本の椰子の木の“休憩所”には、毎朝毎夕、必ず二羽がやって来る。

大きな肩をいからせた一羽と、少し小ぶりの一羽。朝はこっちを向いて、夕はあっちを向いた後ろ姿で、気持ち良さそうに揺れている。

椰子の木は高いから、彼らがどんな表情をしているのかはよくわからないけれど、私は、なんとなく、毎日同じ鷺が来ているのだと信じている。

椰子から目をおろして、視線をまっすぐにするると隣家のマンゴーの木が見える。プランテーションと違って、伸び放題に大きくなったマンゴーの木は、緑の葉っぱをたくさんつけて、もっさりとしたシルエットを見せている。下に広がる木陰は、さぞかし快適に違いない。

去年の12月、遠目にはマロニエの花のような形の朱色の小花が咲き乱れた後に、約束通り実ができて、3月も半ばになった今、そろそろ収穫かなと思えるほど大きく育っている。

それにしても、ずいぶん頑張ってぶら下がっているものだ。大西洋へと駆け抜ける強風の中で、マンゴーは、まるで昔の日本の家の柱にかけられていた、振り時計の丸い球(振り子)のように、揺れ続ける。

ダカールに雨の降らない日はあれど風の吹かぬは一日もなし

少なくとも、今まで生活してきた5カ月は、こんなふうにはたな歌を詠みたくなるくらいの毎日だった。



2014年 04月 21日 掲載

これまでの記事	
第40回	女将さん(その2)
第39回	女将さん(その1)
第38回	園芸店(その3)
第37回	園芸店(その2)
第36回	園芸店(その1)
第35回	庭師(その3)
第34回	庭師(その2)
第33回	庭師(その1)
第32回	亡命(後編)
第31回	亡命(前編)
第30回	クリスマス考(2)
第29回	クリスマス考(1)
第28回	おもてなし
第27回	出会いの妙(続)
第26回	出会いの妙
第25回	着道楽
第24回	森と林のものがたり(その3)
第23回	森と林のものがたり(その2)
第22回	森と林のものがたり(その1)
第21回	長いメール
第20回	遠い道(その3)
第19回	遠い道(その2)
第18回	遠い道(その1)
第17回	リベルナージュ
第16回	コンクール(その3)
第15回	コンクール(その2)
第14回	コンクール(その1)
第13回	空の旅
第12回	ナショナルデー(その3)
第11回	ナショナルデー(その2)
第10回	ナショナルデー(その1)
第9回	パリの休日(続)
第8回	パリの休日
第7回	猫の気持ち(続)
第6回	猫の気持ち
第5回	野生ということ
第4回	風と共に来り
第3回	季節はどこへ行った
第2回	散歩は道連れ...
第1回	パオバブの木陰にて

風を感じて生きている・・・といえば、少し文学 隣家のマンゴーの木とぶらさがる美  
的ではあるけれど、コンタクトレンズを使っている私には、実際、ちょっと辛いものがある。

風速がどのくらいあるのか、RTS＝セネガル国営放送＝を見ている、天気予報の時間になかなかあたらず(もしかしたら、ないかもしれません)よく分からないけれど、マリリン・モンローのスカートを巻き上げるくらいは、ざらにある。

暑かった頃に、おひさまから顔を守りたくて帽子をかぶったことがあったが、ずっと手で押さえていないと飛んでしまいそうで、結局帽子を諦めたほどだった。



半島の突先、南の赤い部分(港や市街)から北の黄色い部分(アフリカ大陸最西端の海岸から飛行場の東側Yofまで)がダカル市

大西洋に飛び出した小さな半島の、しかもその突先に位置するダカル市は、三方を海に囲まれた街である。いや、正確には“三・五方”を囲まれた、つまり、かろうじて大陸に繋がっている、という地形で、そのせいかどうか知らないが、たいていいつも北東から強い風が吹いている。サブサハラでは有数の“都会”で、人口も二百万を数えるけれど、舗装道路の少ないここでは、風が吹けば土ぼこりが舞いあがる。

そして、2月3日、乾季も真ただ中のこの季節、サハラ砂漠の砂を含んだ風は、病原菌も一緒に運んで、ダカルを覆い尽くす(と物の本で読みました)。

いったいどうなるのやら、とこわごわ(?)2月を迎え、確かにどんよりとしたグレーの空を何度も見た。日本だったら、「折り畳み傘をもって出かけよう」と思うような空の色だけれど、もちろん雨など降りはない。

ある朝、海辺に特有の少し生臭い匂いがして、公邸のセネガル人スタッフにそれを言うと、「砂です」といとも簡単な答えが戻ってきた。妙に、納得した。



2月28日。視界100メートル? 家のマンゴーもぼやけて

2月の最後にはとうとう空気中の砂粒が見えるような(気がする)日がやってきて、あわててカメラを持ち出した。

3月になったら、少し空のご機嫌を読みとれるようになって、「単なる(本当の)曇り空」と「砂の灰色」が区別できるようになってきた。

ヒドイ時には、それこそ、一日になんとか拭き掃除をしたくなるし、もちろんコンタクトレンズは着けない。ころなしが口の中もざらざらするようで、のどもガラガラするから、スーパーマーケットでのど飴を買ったりもした。

「引き出しの奥にしまい込んだデジカメが2年で壊れた」というような話も聞かされていたから、余計に砂っぽさを感じたのかもしれない。



2月28日。毎日スタッフが掃除しているベランダに写真を撮るために出たら、こんな足跡が

最近、乾季后半に入って、少しずつ“晴れの日”が増えてきたから良く分かるのだけれど、「本当の砂塵」はおそらくほんの数日だった。

こちらでの生活パターンもできてきていて——例えば、机の上に本や書類を何日も出っぱなしにはしないと、普段あまり使わないものは、袋などに入れてしまっておく、だとか——砂嵐を心配するほどでもなかったな・・・というゆとりも生まれている。

病原菌はもちろん嫌だけれど、それについては、今のところあまり耳にしないので、少なくともダカール在住の外国人たちには縁が遠い話かもしれない。

きっと、鹿児島島の桜島の周辺の皆さまのほうが、「砂塵」には苦勞しておられると思う。